

外国につながる子どもたちのことばを育むための  
ともに学ぶサポーター養成講座

報告者氏名 池田恵子 (NPO 法人教育活動総合サポートセンター)  
加藤真帆子 (NPO 法人日本語・教科学習支援ネット)  
古屋恵子 (NPO 法人日本語・教科学習支援ネット)

実施機関	特定非営利活動法人 教育活動総合サポートセンター
授業名・研修名	平成30年度文化庁地域日本語教育実践プログラム～ともに学ぶ日本語支援事業～ 「外国につながる子どもたちのことばの学びを育むための ともに学ぶサポーター 養成講座」
対象（人数等）	外国につながる児童・生徒への日本語学習支援に関心のある方・希望者、日本語指 導支援者、教職員、保育者など（各回30名）
授業・研修の 目標	外国につながる子どもたちの支援について、彼らの保育園や幼稚園・小中学校での 生活に関連づけ、成長・発達の視点をもって理解し、具体的な関わり方、支援のあ り方について、ネットワークも意識しながら検討する
参考にしたモデルプログラムの番号	②、⑤、⑨、⑩、⑫、⑭、⑮、⑯、⑰、⑱

<実施状況と成果>

①授業・研修等の実施計画

企画の段階で、シラバス一覧をみながら、全体像と各講座の関連性を考えながら計画し、就学前  
の子ども、小学生、中学生、そして地域のネットワークへという流れで日程を組んだ。

回 月/日	テーマ	講師	内容
1 8/5 (日) 26名	就学前後の支 援をつなぐ ～複数の言語 環境で育つ子 どもの「ことば の発達」～	内田 千春 (東洋 大学)	⑩認知発達と言語習得:ことばの発達、複言語で育つ場合のリスクとアド バンテージ ⑫(就学前の)多文化児童の心理と適応:日本にいる外国につながりのあ る子どもとその家族 ⑤小学校(地域支援)の受け入れ体制:プレスクール *グループワーク:テーマに関連した課題、認識、情報の共有
2 9/8 (土) 25名	授業参加に向 けての日本語 指導 ～小学生の課 題～	菅原 雅枝 (東京 学芸 大学)	⑰日本語指導の理論と方法:支援は何を目指すのか(発達段階に応じた 「人」との関係づくり、認知発達を支える活動、基本的な知識やスキル) ⑯日本語に関する内容:日本語の特徴 ⑱言語能力の把握:生活言語・学習言語、4技能のバランス、母語と第二言 語(英語での算数疑似体験)

			*グループワーク:教科書を使った日本語の支援の検討/テーマに関連した課題、認識、情報の共有
3 10/14 (日) 27名	教科学習がわかる日本語指導 ～中学生の課題～	田中 薫 (とよ なか JSL)	⑱言語能力の把握:講師が作成したチェックリストの紹介 ⑰日本語指導の理論と方法:支援方法の実際、高校進学へ向けた指導、つまりきやすいポイント *グループワーク:テーマに関連した課題、認識、情報の共有
4 11/18 (日) 18名	中・長期の日本語指導 ～具体的な指導計画と教材づくり～	築樋 博子 (豊橋 市教 育委 員会)	⑭現場での実践:現場の状況・条件に応じた指導・支援計画の設計 ⑱個別の指導計画の立て方:コースデザイン、日本語プログラムの考え方、個別の指導計画の実際、実際に支援中の在籍学年別に4技能の力の把握 *グループワーク:指導計画の設計
5 12/9 (日) 15名	学校・地域・他 機関との協力 体制づくり ～支援者としてできること～	齋藤 ひろ み (東京 学芸 大学)	②教育コミュニケーションのデザイン:ライフコース・学びの連続性を考える、社会的資源(支援者の役割) ⑨地域の支援ネットワーク:ノンフォーマル教育、多様な立場の教育・支援 ⑮自己の成長、環境づくり:事例紹介、自身の人生および支援活動との関係についてふりかえり *グループワーク:各地域での日本語支援のネットワークの実際を共有

②実施時の受講者の参加の様子(アンケートや観察から)

- 既に支援を実践しても多く、「紹介された各地の取組が参考になった」「支援の具体的な事例がよかった」「自身の支援をふりかえる機会になった」といった肯定的な反応がほとんどだった。
- 受講者同士の課題等共有には積極的に話し合いがされ、「立場は違っても共通点はある」「現場では一人で支援していて、他の人の支援の工夫が学べた」など気づきや学びが得られた様子である。
- 地元だけでなく、県内外からも学校・地域の支援者、国際教室の担当教員、通訳者、行政職員、未経験者など多様な立場で参加していたが、学び合いができたようだ。

③成果(目標の達成の度合い等)

- 就学前の子ども、小・中学生、そして地域へという流れで計画したので、参加者にも目的が明確であったせいかな昨年度実施の同事業に比べ、大幅に参加者が増えた。講師の方にも、全体像と各講座の位置づけを示すことができ、講座の目的を共有しやすかった。
- 「学校と地域連携の必要性」「支援者としての自身の役割や立ち位置、支援の方法をあらためて再認識した」「発達段階や個人の特性に応じた支援の工夫が必要」等のアンケート回答があり、子どもの成長や発達を意識しながら支援することやネットワークの重要性が認識されたと考えられる。

④課題

- サポーター養成を目的として広報したが、既に支援されている方(県外からも)の参加も多く、キャンセル待ちも出てしまった。どんな参加者を優先するか受付および広報の課題が残った。
- 受講者のニーズが多様で、情報の共有等のグループワークに割く時間配分が難しかった。